「エトナ山上のエンペドクレス」におけるロマンティシズム

村瀬順子

ヴィクトリア朝という時代は、科学の急速な発達が大英帝国に大いなる物質的繁栄をもたらした反面、金権主義がもたらす道徳の荒廃、下層階級の貧困と過激化、民主主義の抬頭などが深刻な社会不安を引き起こした時代であった。文学においても科学的精神は、カーライル（Thomas Carlyle, 1795-1881）が、『衣裳哲学』（*Sartor Resartus*）において「汝のバイロンを閉じてゲーテを開け！」と高らかに叫んだように、情緒的・想像的なロマンティシズムに対する批判となって表われ、知識の追求・知的解放の必要性が強調された。と同時に、深刻化する社会の危機意識の高まりの中で、多くの作家たちが、社会の改良者・伝道者としての義務感に駆られ、積極的に社会問題に取り組んだ時代であった。

マシュー・アーノルド（Matthew Arnold, 1822-88）もまた、そうした時代の影響を強く受けながら「教養の使徒」としての義務を自らに課した十九世紀後半の代表的批評家の一人である。しかし、アーノルドにとって批評家に至るまでの道のりは決して単純なものではなかった。なぜなら、アーノルドは、その内面に知性が否定したはずのロマン主義的感性を引きずっていたからであり、知性と感性の相剋の過程を経ずしては、批評家アーノルドは誕生し得なかったからである。筆者が興味をもつのは、批評家としてのアーノルドではなく、むしろ批評家アーノルドの背後に埋没していった詩人としてのアーノルドである。それは、詩の

中にこそアーノルドの素顔が、彼の真実なる心情が表われいると思われるからである。

アーノルドは知的探求心のはけ口をゲーテ、セナンクール、ルクレティウス、スピノザに求めたが、それによって得た知的解放の代償として彼が負わなければならなかったものは、信仰の喪失であり、神不在の世界の中で拠り所を見失なった孤独な魂の苦悩であった。

ああ、恋人よ、お互いに真実でいよう、
なぜなら、僕たちの前に、夢の国のように
鮮やかに美しく若々しく横たわる世界は
実は、歓びも愛も光も
確かさも静けさも苦しみを救う力ももってはいないのだ。
僕たちのいるのは、ちょうど闇がおりてくる平原、
そこでは争いと逃走の混乱があふれ、
無知な軍勢が闇の中で相撃っている。①

科学的精神に基づいた知識の追求は、必然的に神への懐疑・自然に対する違和感へとつながっていく。もはやロマン派詩人たちが高らかに歌いあげた自然への統合の望みも断たれ、自然の美しさに対する喜びに浸ることもできなくなった人間は、現実の世界の中で絶望と不安に駆られながら、魂の救済の道もなく孤独の中で苦悩しつづけなければならない。知性に対する感性の優位を信じることのできた時代は去り、今や知性の感性に対する横暴が人間精神を荒廃させて行く。アーノルド自身が苦闘し続けた問題は、同時に、当時の知識人一般が直面した問題でもあった。この小論では、一八五二年に出版された『詩集』の表題詩である「エトナ山上のエンペドクレス」（'Empedocles on Etna'）を取り上げ、そこにアーノルドのどのような心情及び問題意識が表わされているかを見ることによってアーノルドの詩の特性について考察していきたい。

劇詩の形をとっているこの詩には三人の人物が登場する。ギリシアの最後の哲学者エンペドクレス（Empedocles）とエンペドクレスの弟子のパウサニアス（Pausanias）、若いハープ奏者のキャリクレス（Callicles）である。この詩がエトナ山の噴火口に身を投じた古代のエンペドクレスを題材に取りながら現代的な問題を描き出したものであることは、一八五三年の『詩集』の序文の中でアーノルド自らが明らかにしているが②、エンペドクレスはここでは知性の追求の果てに感情を枯渇させてしまい、思想の奴隷と化した、

いかにもヴィクトリア朝の時代精神が生んだ人物として描かれている。それに対して、キャリクレスは実在の人物をモデルにしたものではなく、アーノルドがエンペドクレスと対照させるべく設定した人物である。彼は自然の美しさを享受することができ、ギリシア・ローマの神話の世界に時を忘れて、あるいは、時代を超えて浸ることのできるロマン主義者である。自然の美しさの中に魂の安らぎを感じることのできるキャリクレスは、「誰が、この美しい自然の中で心を病むことができよう。[3]」と言っているように、エンペドクレスの憂うつを和らげる一番良い方法は自然の美しさ以外にはないと信じ、エンペドクレスの見えない所からある時は自然を讃美し、またある時は神話の世界を歌いつつ琴を奏でるのである。キャリクレスとエンペドクレスの相異は、単に一青年と一老人が示す相異ではなく、その中に私たちはロマンティシズムからヴィクトリアニズムに至る精神史の縮図を見ることができる。

次にパウサニアスであるが、彼は依然としてエンペドクレスの魔力を信じている迷信深い医者であり、その魔力の秘密を聞き出そうとしてエンペドクレスから教えを受ける人物である。彼の存在理由は、彼自身の人生観にあるというよりはむしろ弟子に対する師としての、ひいては社会に対する伝道者としてのエンペドクレスの側面を引き出すことにある。アーノルドは一幕二場においてエンペドクレスの対社会的メッセージを展開し、続く第二幕において自らが与えた処世訓に従ってもはや生きていけないエンペドクレスの孤独な魂の自己対話を展開することによって、エンペドクレスという人物を対社会的立場と個としての立場の両面から描いている。エンペドクレスのそうした二面性はまた、アーノルド自身の内面に渦巻いていた二面性とも無縁ではあるまい。次にそれを詩の内容に即して見て行こう。

一幕二場においてエンペドクレスが神の仕業に恐れを抱いているパウサニアスに向って説いているのは、そうした幻想や迷信にとらわれない理性の目で認識された宇宙の実体と、その中で人間はいかに生きるべきかという倫理的問題についてである。先ずエンペドクレスは人間が世界の中心であり支配者であるという思い上がった考え方を否定する。[4]

我々人間は王ではない、
人間一人一人が支配するために
新たな世界が作られるのではないのだ、世界は
人間が弄ぶためにのみ意図されたものではない、

否、我々がここでは門外漢なのであり、世界こそ古く
　から存在していたものである。
我々の抑圧された意志は無駄な焦燥を覚えるのみ
世界は否応なく、それを征服する。
我々自らが設けたのではない限界が
我々の為すこと全てを制限する、
我々は生に生まれ出で、生は、その必然として我々の
　鋳型となる。[5]

古くから存在している世界の中に生まれ出るということは限られた条件の中で生きなければならないことを意味する。この点を正しく認識すれば自らどの範囲で満足すべきであるかがわかるはずである。にもかかわらず「世界の動きに目を向けず、思い通りに世界を動かそうとする[6]」人間は、世界に対しても、また自己の能力に対しても愚かな幻想を抱いているにすぎないのだ、とエンペドクレスは批判する。人は生まれた時から幸福への願望を抱いている。その願望自体は誤りではないが、世界がその幸福を人間に与えるために存在しているのだと考えるところに誤ちがあるとする。

人が間違っているのは　彼の幸福が
彼の真実の目的と考えているからではない、
人が間違っているのは
世界が、その幸福を与えるためにのみ存在していると
　夢見るからである。[7]

こうした自己中心的な幻想から、人は誤った期待や願望を抱き、その挙句に、願望が満たされないことに腹を立て、苦しみのはけ口として人間に敵対する神、あるいは運命という虚像をつくり出して責任を転嫁しようとする。

――無言で苦しむことを嫌う我々は、
我々が耐えるべき不幸の原因を
押しつけるべき神々を
真空地帯につくり出す、
そうして神や運命をののしることで苦痛を
　和らげるのだ。[8]

エンペドクレスは、人間に敵対する邪悪な神々も、また逆に人間の能力を超えた万能の神――この世において人間が成し遂げることのできなかったことを成就する力をもち、

人間がこの世の中で得ることのできなかった幸福をあの世で与えてくれるような神――も、人間が勝手につくり上げた妄想であり実在しないのだと説く。エンペドクレスが許容する神は、せいぜい万物に浸透し、万物を常に支えようとするのだが、時に力尽きて失敗する「過重な労働を課された力」（the o'erlaboured Power）[9]にすぎない。それでは神に保護されていない孤独な人間はどこに救いを見出せばよいのか。エンペドクレスは自己の魂へ向かえと説く。

ひとたび汝自身の胸の内を正しく読みとれば、
恐怖は去ってしまう、
人は　たとえ千年もの間、探し求めようとも
それ以外の光明を得ることはない。
汝の中に沈潜せよ！　その聖なる社にて汝を苦しめるものが何であるかを問うがよい！[10]

頼るべき神の不在と思想の混乱の中で懐疑に陥っている人間にとって唯一の救いは自己の中に沈潜することであるというエンペドクレスの教えは、アーノルドの詩にくり返し示唆されているあの「埋もれた生」（'the buried life'）を想起させる。が、しかし、ここでのエンペドクレスは、社会における人間の努力の可能性を強調することも忘れない。

私はこう言おう、恐れるな！と。
人生には、まだ人間が努力する余地が残されている。
ただし、人生には悪が満ちているので、
法外な願望は抱いてはいけない、
なぜなら、夢を見なければ絶望する必要もないのだから！[11]

結局、法外な願望を抱かず、現実の限られた枠の中で正しい行ないを為し、今、手に入れることのできる喜びに満足して生きる――これがエンペドクレスがパウサニアスに与えている極めてストイックな処世訓であり、そこに示されたエンペドクレス像は、神不在の宇宙を達観している合理主義者、そして、その宇宙の中で人間の自制と努力の必要性を強調するモラリストとしてのそれである。読者はここに批評家アーノルドの姿勢に通じるものを見る思いがする。

これに対して第二幕では、自らが与えた処世訓にもはや救いを見出すことのできないエンペドクレスの孤独な魂の苦悩が独白の形で語られることによって、読者はパウサニ

アスに対する師としての姿勢の背後に潜む彼の内面世界へとさらに深く入っていくことができる。ここでエンペドクレスがひとり佇むエトナ山の火口付近は、木も草もなく山肌がむき出しになっている荒寥とした場所であり、魂の柔軟さを失なったエンペドクレスの内的風景を反映していていかにもふさわしい。

先にエンペドクレスはパウサニアスに自己の中に生きる勇気と支えを見出すべきことを説いたが、彼自身にとってそれは不可能である。なぜなら、知識の追求、真理探求の旅の果てに今や彼の人間としての全一性（integrity）は崩壊に瀕しているからである。かつて、彼は意気揚々として真理探求の道を歩んだ。その頃はまだ心の均衡も失なってはいず、思想の重荷に耐え得るだけの感情の豊かさをも有していた。エンペドクレスは、過ぎ去った昔を懐しむ。

あれはどのような時代だったのか、パルメニデスよ！
わたしたちが若かった時、イタリアのあらゆる都市で
同志たちを数多く数えることができた頃、
心を踊らせながら、そなたたち太陽の娘たちに加わって、
真理の道を歩んだあの頃は。

あの頃、わたしたちはまだ楽しむこともできたし、どのような思想も
どのような外界の事物も私たちを拒絶しなかったし、
私たちにとって無価値でもなかった、
私たちは純粋で自然な喜びを感じながら
素朴な精神の上に強力な思想の衝撃を受けとめていた、
たとえ、聖なる知識の重みが頭脳を圧迫することがあったとしても、
世間との喜ばしい交流のうちに、その圧力が和らぎ、
額の筋肉もほぐれ、思想が再び自由に流れ出すのを
感じる力を持っていた。
あの頃、わたしたちは心の均衡を失なってはいなかったし、
思想の奴隷でもなく、すべての生まれながらの喜びに
対しても無感覚ではなかった。[12]

しかし、今や時代が変わり、エンペドクレスの生きた古き良き時代は去ってソフィストたちの横行する暗澹たる時代となり、その中で彼は「追放された市民」（'the banished citizen'）[13]として孤独に生きなければならない。しかも追放されたことが彼の最大の不幸なのではなく、キャリクレス

が「彼自身の中に苦しみの根源、／秘密の、辿ることのできない悲しみの鉱脈が潜んでいて／そのために時代が彼には暗く悲しいものに見えるのだ。[14]」と指摘している通り、彼の最大の苦悩は、彼の内部に生じた分裂であり荒廃によるものであった。長年の知的探求の果てに彼が得たもの、それは心の平安でもなければ歓喜にあふれた感動でもなく、[15]肥大化した知性に蝕まれた感性の不毛化であり、自意識の病に冒され、生ける屍と化した人間の孤独と人生に対する疲労感であった。エンペドクレスは夜空に輝く星を仰ぎ、眼下に海を見下ろしながら自らの不毛を嘆く。

ああ、わたしがこの山のように燃えることができればよいのだが！
ああ、わたしの心がこの海のうねりのようにはずめばよいのだが！
ああ、わたしの魂が星のように光に満ち満ちていればよいのだが！
ああ、わたしの魂が空気のように世界を覆っていればよいのだが！

しかし、この心はもはや燃えることはないであろう、

エンペドクレスよ、おまえはもはや生きた人間ではないのだ！
ただ思想を食いあさる炎であり、——
ただ裸の永遠に安らぎをもたない精神に
すぎないのだ！[16]

エンペドクレスはまた、ゼウス（Zeus）の怒りを買ってエトナ山のふもとに葬られたタイフォー（Typho）の神話を歌うキャリクレスに耳を傾けながら、タイフォーに深い同情を示す。それは「勇敢で熱烈な心（タイフォー）は至る所で／陰険で策略的な頭脳（ゼウス）に屈する[17]」ことへの同情であり、知性の圧制が感性を犠牲にせずにはおかなかったところにエンペドクレスの破綻の原因があるからである。このようなエンペドクレスの苦悩は、アーノルドが「学者ジプシー」（'The Scholar-Gipsy'）において、

病める焦燥、分裂した目的
過重な労働を課された頭と萎えた心をもつ
現代生活のこの奇妙な病い[18]

と呼んだものと正に同一のものであると言えるだろう。

人生に疲れ果てたエンペドクレスは、エトナ山の噴火口に身を投げるつもりで、そこにひとり佇んでいる。しかし、彼の自意識は、思考の奴隷と化した自己の精神は、帰着すべきところもなく、死ぬことすら出来ないのではないかという不安に襲われている。

全てのものは、それが生じてきた
四大要素へと帰っていく[19]——
我々の肉体は土に、
我々の血は水に、
熱は火に、
息は空気に帰る。
それらは立派に生まれ、立派に葬られるであろう——
しかし、精神はどうであろうか？
（中略）
しかし、精神は？　しかし、思考は？
もし、それらが我々の支配的部分であったとしたら
——
それらはどこに根源を見出すのであろうか？
何がそれらを受け入れ、故郷へと呼び戻してくれるのか？
我々は依然としてそれらの中にとどまり、それらは我々の中にとどまって、
我々は、この世界から疎外されたものとなるであろう、
それらが今と同様、我々の支配者となり、
我々を自意識の囚われ者としてつなぎとめ、
それらの形や様式や息苦しい帳（ベール）を通してでなければ、
我々に全体を把握したり感じたりさせないであろう。
我々は今と同様に満たされず、
渇望の苦しみを感じ、
生の真髄を求める言語に絶した願望が
永遠に挫かれるのを感じるであろう、しかも依然として
思考や精神は当てどのない旅へと我々をせきたてるであろう、
精神とは無縁の、閉ざされた地上を渡り、
知らぬふりをする海を越えて、
一方、風は激しく吹いて、我々を海へ陸へと押し返し、
火はその生き生きとした炎の波から我々を退ける。
それ故、不承々々、我々は
この厄災の草原、
この不愉快な場所、この人間の生活へと戻っていく、

そこで個々の人間に宿り、
悲しい試練を再びくり返す、
今度こそ人生の平衡を保つことができるかどうか、
今度こそ、それと一つになることで全世界と一体化できる
我々自身の唯一の真の埋もれた自我に
真実でいられるかどうか、
それとも肉体あるいは精神のどちらかにつながれてしまうか
感覚の泥沼、あるいは傲慢で孤独な思考力によって
鍛えられた空想の迷路に再び陥ってしまうかどうかを見るための試練を。
我々が生まれ出ることになるこれからの時代はすべて前の時代以上に我々にとって危険を孕んでいるであろう。
一層鋭いとげで我々の感覚を責めさいなみ、
我々の精神をいら立たせて、より強烈な活動へと駆り立て、
本来の私たち自身をより識別しがたいものにするであろう。
我々は、しばらくの間、苦闘し喘ぎ反抗した後
逃げ場を求めて過去へ、
その疲れを知らなかった青春の魂、偉大さの息吹きへと向うであろう、
すると現実が我々を引き戻し、
その熱い手で我々をこね、我々の本性を変えてしまう。
我々は努力する力が衰えるのを感じ、
最後にもう一度、戦おうとして力をふりしぼり――そして失敗する、
我々は勝ち目のない戦いの中に埋没し、
永遠にさ迷うであろう。[20]

人間にとって最も残酷なことは、死においてすら魂の安らぎを得られないことだ。ここに長々と引用したエンペドクレスの遅疑逡巡の中には、知性に偏した時代精神に対するアーノルドの危機感が強烈な形で表現されている。

私は、理性の行使が感情を凍らせてしまうものであり……しかも、感情や宗教的感情こそが、永遠に人間存在の最も深遠なる本性であり、人間にとってのあらゆる喜びと偉大さの根本であるという気持ちを禁じ得ない。[21]

ゲーテやセナンクールに知的救済を求め、ロマン主義をその批評的知性の欠如故に否定したアーノルドであった。が、しかし、この言葉の中には、生の本質は頭にではなく心に、知性にではなく感性にあるのだというアーノルドの実感、そして、知性が感性を麻痺させ、人間を生の本質から益々遠ざけてしまうことに対するアーノルドの正にロマン主義的な反感が明確に示されている。否、詩以外のところで根拠を求めずとも、アーノルドが詩の中で繰り返し示唆している「埋もれた生」とは人間の奥深い所、いわば無意識の底に流れる生の本質であり、人間を自然に統合させる唯一の残された絆である。これこそロマン主義的発想から生じたものに他ならない。

アーノルドのロマンティシズムは、エンペドクレスの投身場面で最も象徴的に示されている。エンペドクレスは、彼の魂が完全に思考の奴隷と化して、自然との絆を永遠に断たれてしまう前に、そして「魂の永遠の深い暗闇が訪れる前に」[22]噴煙をあげるエトナ山の火口に身を投じる。

――ああ、汝ら水蒸気よ、沸騰せよ！
汝、火の海よ、踊り唸れ！
わたしの魂は、おまえたちを迎えようとして燃え上がる。
わたしの魂が衰えないうちに、落胆と憂うつの霧が突進して再びわたしの魂に覆いかぶさらないうちに
わたしを受け入れ、救ってくれ！[23]

エンペドクレスの自殺は、母なる自然への帰一、自然との融合へのロマン主義的願望の表われに他ならない。噴煙を吐くエトナ山の火口がバイタリティー（生命力）の象徴であるとするならば、エンペドクレスは、失なわれた過去の生命の歓び、ロマン派的エクスタシーの世界の中に最後の救済を求めたと言えるのではないだろうか。

先に筆者はエンペドクレスとキャリクレスのコントラストについて触れたが、キャリクレスの中に若き日のエンペドクレスを、そして、エンペドクレスの中にキャリクレスの行く末を見ることも不可能ではない。なぜなら意識の過剰、知性の肥大化がもたらす感性の荒廃、人間としての全一性（integrity）の崩壊に原因するエンペドクレスの苦悩は、本質的にロマン主義者の苦悩であり、その点において両者は根本を同じくしているからである。ただ、「学者ジプシー」においてアーノルドが、「現代生活の奇妙な病い」から逃れて自然の中に生きることを選んだ学者ジプシーを

無条件に称えていることと考え合わせると、学者ジプシーと同類のキャリクレスのロマン派的人生観がいかにも非現実的な響きをもち、しかも結局はエンペドクレスの苦悩を解決することができなかったということは、アーノルドの内部に現実に対する認識が強まっていたこと、あるいは、そうした現実認識に直向うから取り組んでいることを示している。この詩がアーノルドの詩の中でも秀作の位置を占めているのは、この詩に表わされているエンペドクレスの苦悩、及び、その中に投影されているアーノルドの苦悩が、現実認識に裏づけられた緊迫感をもって読者に迫ってくるからであろう。

にもかかわらず、アーノルドは一八五三年に出版された『詩集』から、この詩を削除した。その理由は、『詩集』に付された序文に次のように書かれている。

そこでは苦悩は行為の中にはけ口を見出さない。精神の絶え間のない苦境がただ引きのばされ、事件や希望や抵抗によって和らげられることがない。すべては耐えられるばかりで何も為されることがない。そのような状況には必然的に何か病的なものがあり、その描写には何か単調なものがある。それが実人生に起こった時、悲劇的ではなく苦しいだけである。それを詩に描くこともまた苦痛を与えるだけだ。[24]

さらに、次のようにも述べている。

自己の精神状態のアレゴリーが詩の最高の目的だって！　いや、そんなことは断じてない。そんなはずはあり得ない。かつて偉大な詩がそのような目的をもって書かれたことはない。詩は行為を模倣するものだ。[25]

アーノルドの詩の主題が彼自身の内的葛藤に他ならなかったとするならば、この序文は彼の詩の本質を、ひいては詩人としての自己をも否定するものである。そしてここにはロマン主義批判を行なった、後の批評家としての姿勢がすでに現われていると言えよう。詩人としてのアーノルドと批評家としてのアーノルドが互いに両立し得ないものであった以上、詩人の本能を切り捨てざるを得なかったアーノルドには、社会に対する並々ならぬ危機感と使命感があったことであろう。しかし、アーノルドの詩から批評への転向は、アーノルドが詩の中でかくも誠実に取り組んだ彼の内的葛藤を克服した上でのことであったかどうか。筆者

には、そうは思えない。とすれば、批評家としてのアーノルドの中に、埋没していった詩人アーノルドの片鱗を見ることはできないだろうか。例えば、「埋もれた生」の一変形が『教養と無秩序』(*Culture and Anarchy*, 1869) における「最良の自己」('the best self') に表われていると言えないだろうか。それを辿っていくためには、アーノルドの批評へと入っていかなければならない。

Text: Kenneth Allott (ed.), *The Poems of Matthew Arnold* (Longman, 1979)

註

① 'Dover Beach', ll. 29–34.

② アーノルドは、一八五三年の『詩集』の序文の中でエンペドクレスの現代性について次のように述べている。

「ギリシア初期の天才の偉大な作品しか知らない者が、それらの独自の特徴であると考えているもの――静かな心、快活さ、公正な客観性――は消失し、精神の自己対話が始まり、近代的な問題が現われてきた。我々はすでにハムレットやファウストの疑心を聞き、彼らの失意を目撃している。」(R. H. Super (ed.), *On the Classical Tradition* (Univ. of Michigan Press, 1960), p. 1)

③ 'Empedocles on Etna', Act I, scene i, l. 20. (以下 'Empedocles on Etna' を省略)

④ 'The Youth of Nature' 及び 'The Youth of Man' においてアーノルドは人間に対する自然の優位を強調している。

⑤ Act I, scene ii, ll. 177–86.

⑥ Act I, scene ii, l. 221.

⑦ Act I, scene ii, ll. 173–6.

⑧ Act I, scene ii, ll. 277–81.

⑨ Act I, scene ii, l. 291.

⑩ Act I, scene ii, ll. 142–6,

⑪ Act I, scene ll. ii, 422–6.

⑫ Act II, ll. 235–57.

⑬ Act II, l. 11.

⑭ Act I, scene i, ll. 151–3.

⑮ アーノルドはエンペドクレスという人物を分析して「彼は今も真理を見ることが歓びと平安をもたらし得ることを否定はしていない。」と書いているが、この詩からはそうした肯定的な面は感じられない。Text p. 154 参照。

⑯ Act II, ll. 323–30.

⑰ Act II, ll. 90–1.

⑱ 'The Scholar-Gipsy', ll. 203–5.

⑲ 「万物の根」は土と水と火と空気であり、すべてはその四大要素から生じ、それらへと帰っていくというのが古代の哲学者エンペドクレスの持論であった。

⑳ Act II, 345–89.

㉑ イェール大学所蔵のアーノルドの原稿からの引用。Kenneth Allott (ed.), *The Poems of Matthew Arnold*, p. 157.

㉒ Act II, l. 35.

㉓ Act II, ll. 410–6.

㉔ R. H. Super (ed.), *On the Classical Tradition* (Univ. of Michigan Press, 1960), pp. 2–3.

㉕ Ibid., p. 8.

参考文献

Paull F. Baum, *Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold* (Duke Univ. Press, 1958)

David J. Delaura (ed.), *Matthew Arnold*—A Collection of Critical Essays (Prentice Hall, 1973)

Leon Gottfried, *Matthew Arnold and the Romatics* (Routledge, 1963)

J. D. Jump, *Matthew Arnold* (Longmans, 1955)

William A. Madden, *Matthew Arnold*—A Study of the Aesthetic Temperament in Victorian England (Indiana Univ., 1967)

Fraser Neiman, *Matthew Arnold* (Twayne, 1968)

Lionel Trilling, *Matthew Arnold* (Columbia Univ. Press, 1939)

高橋康也『エクスタシーの系譜』(あぽろん社、一九六六年)

吉村昭男『アーノルドの詩——詩想の遍歴——』(あぽろん社、一九七九年)

尚、引用文の訳は全て拙訳である。

(本学助手　英文学)